

田上町行屋崎遺跡出土の北関東型須恵器

田 中 祐 樹

1 はじめに

これまで筆者は、田上町行屋崎遺跡にかんする研究を継続的に進めてきた（田中2018・2019ほか）。これまでの取り組みのキーワードの一つが「移民」であり、即ち、考古資料の分析を通じて「移民のムラ」としての行屋崎遺跡の具体像を素描することを目標としている。小稿はその取り組みの一つとして、本遺跡から出土した北関東型須恵器と推定される資料について紹介する。

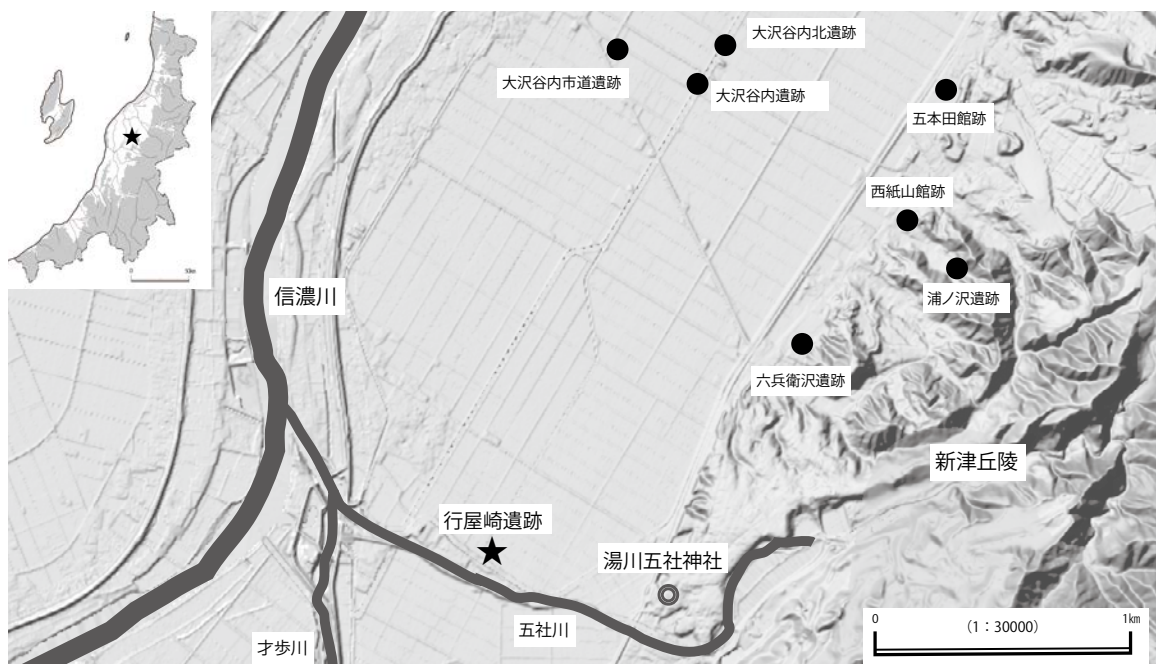
2 行屋崎遺跡の概要と遺跡の評価

行屋崎遺跡は、新津丘陵を望む五社川右岸の自然堤防及び、旧五社川流路に所在する（第1図）。平成24（2012）年に、一般国道403号道路改築工事に伴う試掘確認調査で、土坑、ピットといった遺構と9世紀代の土師器や木製品が確認されたことから新発見遺跡「行屋崎遺跡」が登録されている。この試掘確認調査の結果を受けて、翌年5月から、田上町教育委員会による本発掘調査が実施されている（田畑ほか2015）。調査では、旧五社川流路であるSR400と、その北側の自然堤防上に展開する掘立柱建物を中心とした集落域を確認しており、帰属時期が概ね飛鳥Ⅲ段階であることが明らかになっている。

飛鳥時代の遺構は、五社川旧流路（SR400）、掘立柱建物16棟、溝11条、土坑129基、ピット300基、杭28基である。遺物は、五社川旧流路（SR400）を中心に、土器（須恵器、土師器）、石製品（紡錘車、権状錘、砥石、凹石）、木製品（農耕具、把手付槽、丸木弓、皿等）、金属製品（銅鈴、雁股鋸、錫製耳環、鉄斧、鉄製鏝）、土製品（羽口、人形土製品、馬形土製品、円筒形土製品、板状土製品、移動式カマド）が出土している。

このように行屋崎遺跡では、多様な出土遺物が認められるが、特筆すべきなのは一般的な農耕具が少なく、儀礼祭祀色の強い遺物が目立つ点である。行屋崎遺跡に近接するほぼ同時期の集落遺跡である新潟市大沢谷内遺跡（前山ほか2012）が、律令的祭祀色が強いのに対し、古墳時代的な様相を多分に留める構成といえる。このような点から、一般的な農業生産に依拠した集落ではなく、製鉄・鉄器生産、木器生産といった手工業生産を生業とした集落との評価がある（田畑ほか2015）。筆者は、城柵設置前後の新潟県内における外来系土器を「東北北部系（北方系）」・「東北南部系（栗田式）」・「関東系」に峻別し、分析を行う中で、行屋崎遺跡の土器についても検討をおこなっている。行屋崎遺跡のヘラ削り整形の小型台付甕2点を関東系、有段の杯・高杯や脚部に透かしを施した須恵器模倣高杯を東北南部要素を持つ土器としたほか、東北系全般にみられる要素を持つ土器として、頸部を巡る段をもつ甕や、底部側面が著しく張り出す甕、底面に木葉痕を持つ土器を挙げた。また、透かし入り高杯が太平洋側の城柵官衙関連遺跡から出土する傾向が強いことを含め、集落の中に柵造営に伴い東北南部から政策的に動員された「移民」が含まれていた可能性を指摘する（田中2018、2019）。

さらに遺跡周辺に目を転じてみると、行屋崎遺跡の北東約1.8kmには前述した新潟市大沢谷内遺跡、丘陵上では平安時代の須恵器窯跡である六兵衛沢遺跡、中世城館の西紙山館跡などが所在する。



第1図 行屋崎遺跡の位置と周辺遺跡

国土地理院地図（傾斜量図）に加筆

3 北関東型須恵器について

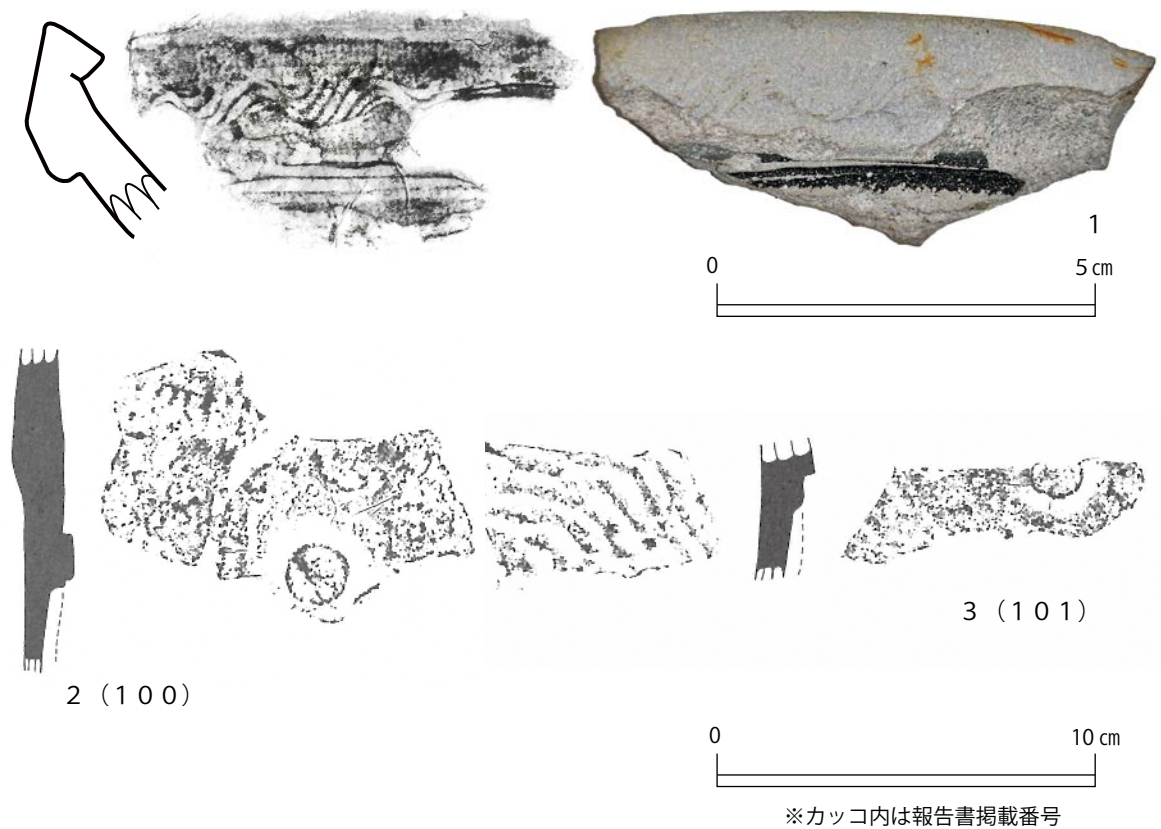
本用語は、群馬県域を中心とする北関東地域において散見される特徴的な形態を有する須恵器の総称であり、酒井清治によって見出された（酒井1988、1991ほか）。その後、酒井の研究を継承した藤野一之によって再検討がなされており、その特徴は第1表のとおり整理できる。北関東系須恵器の分布域において最も早くその特徴を見出せる資料は群馬県域であることから、その特徴は群馬県域で成立し、近隣地域への製品、技術の拡散したことが指摘されている（藤野2009、2019）。

第1表 北関東型須恵器の特徴

器 種	特 徴	時期（藤野編年）	主な出土遺跡
蓋 坏	「八」の字状口縁部坏蓋	Ⅳ期～	綿貫観音山古墳（群馬県高崎市）
	手持ちヘラ削り	Ⅴ期～	入宿遺跡（群馬県太田市）
	受け部の短い坏身	Ⅲ期～	黒井峯遺跡（群馬県渋川市）
高 坏	1段透かしの残存	～Ⅴ期	菅ノ沢窯（群馬県太田市）
	脚端部の開く高坏	Ⅱ期～	築瀬二子塚古墳（群馬県安中市）
	交互透かし	Ⅲ期～	黒井峯遺跡（群馬県渋川市）
ハソウ	肩部に凸線が巡るハソウ	Ⅰ～Ⅴ期	井出二子塚古墳（群馬県高崎市）
	樽形ハソウの残存	～Ⅳ期	館野遺跡（群馬県渋川市）
提 瓶	絞り技法	Ⅱ期orⅢ期～	金山窯（群馬県太田市）
	環状把手の残存	Ⅱ期～Ⅶ期	金山窯（群馬県太田市）
	平底瓶	Ⅱ期～	恵下古墳（群馬県伊勢崎市）
壺	脚付長頸壺の存在	Ⅴ期	綿貫観音山古墳（群馬県高崎市）
甕	補強帯	Ⅳ期～	菅ノ沢窯（群馬県太田市）
	口唇部波状文	Ⅳ期～	井出二子塚古墳（群馬県高崎市）
	口縁部内波状文	Ⅳ期～	綿貫観音山古墳（群馬県高崎市）
	格子文の叩き具	Ⅴ期～	中筋遺跡（群馬県渋川市）
	渦巻き文の当て具	－	引切塚遺跡（群馬県前橋市）
	ラセンナデ	Ⅰ～Ⅳ期	白藤古墳群（群馬県前橋市）

第2表 参考 編年表（藤野2019）

時 期	概 要	年代比定	主な出土資料
I 期	群馬県内での須恵器生産開始	TK47	三ツ寺遺跡（群馬県高崎市）
II 期	提瓶・平底瓶の生産開始 群馬県内での横穴式石室導入	MT15	前二子古墳（群馬県前橋市） 恵下古墳（群馬県伊勢崎市）
III 期	横瓶の出現か	TK10（古）	久保遺跡（群馬県富岡市） 伊熊古墳（群馬県渋川市）
IV 期	Hr-FP	TK10（新）	黒井峯遺跡（群馬県渋川市）
V 期	大型器台の生産停止	TK43	菅ノ沢窯（群馬県太田市） 綿貫観音山古墳（群馬県高崎市）
VI 期	平瓶の出現か	TK209	八幡観音塚古墳（群馬県高崎市）
VII 期	坏Gの出現	飛鳥 I	奥原古墳群（群馬県高崎市）



第2図 行屋崎遺跡出土の北関東型須恵器

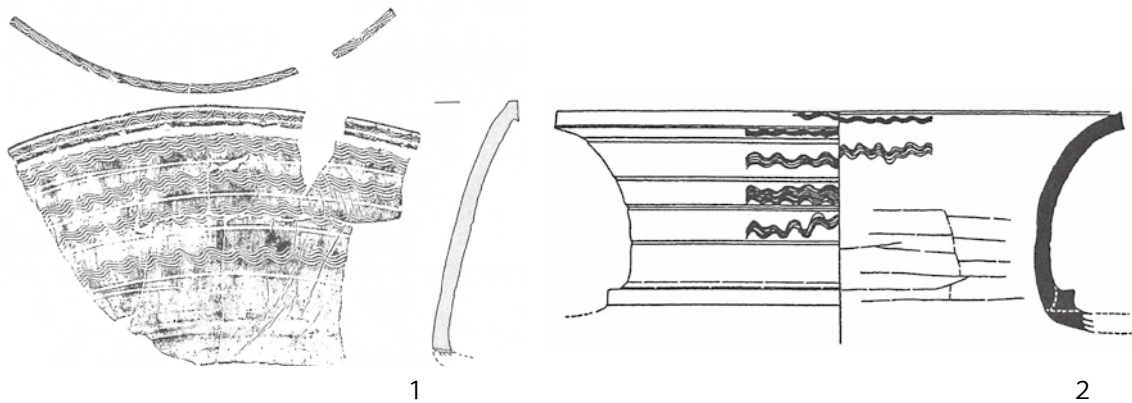
4 資料の概要

4-1 口縁部に波状文を持つ須恵器甕（第2図-1）

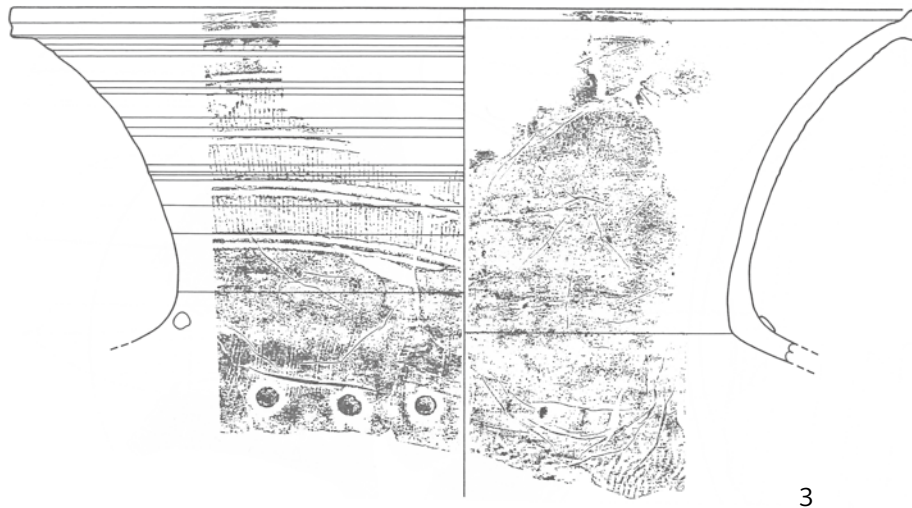
飛鳥時代の自然流路であるSR400出土の須恵器甕の口縁部である。二条の沈線から上位の口縁部端部（口唇部）に4条の波状文が描かれる。小片のため時期比定は困難だが、SR400出土資料の大半が7世紀第Ⅲ四半期に位置づけられることから、本資料も概期の所産と考えられる。この口唇部外面の波状文という特徴は、北関東型須恵器にも散見されるもので、類例としては、群馬県高崎市井出二子山古墳（高崎市教育委員会2009）、茨城県筑西市丑塚Ⅲ号墳（協和町小栗地内遺跡調査会1986）などがある（第3図）。

4-2 外面肩部に円形浮文をもつ須恵器甕（第2図-2・3）

肩部に円形の浮文（ボタン状貼り付け）が確認される。いずれも外面に平行タタキ、内面に同心円当て具痕が残る。小片のため詳細な時期比定は困難であるが、飛鳥時代の包含層であるⅡC層出土なので飛鳥時代に帰属する可能性が高い。この肩部外面に円形浮文という特徴は、酒井清治や藤野一之らが提唱する北関東型須恵器の特徴には該当していないが、既に奈良佳子が指摘するように、同様の特徴を持つ資料が群馬県高崎市少林山台遺跡（飯塚・徳江1993）から出土している（奈良2022）（第3図）。さらに、少林山台遺跡の須恵器は群馬県高崎市乗附窯跡群の製品の可能性が高いという奈良の指摘を踏まえ、北関東型須恵器の範疇で把握すべきと考える。



口縁部上端に波状文を有する須恵器甕



肩部外面に円形浮文を有する須恵器甕

- 1：丑塚古墳群Ⅲ号墳石室周辺
- 2：埼玉県神川町No.200古墳
- 3：少林山台遺跡
- ※いずれも縮尺不同

第3図 北関東型須恵器の類例

6 まとめにかえて－今後の課題－

小稿では行屋崎遺跡から出土した北関東型須恵器と考えられる須恵器3点について、その概要を述べた。管見ではこれまで新潟県域で明確な北関東型須恵器の出土例は確認されておらず、新潟県域で初めて北関東型須恵器が確認されたことになる。行屋崎遺跡では、東北系土器（田中2018、2019）、関東系土器（田中2019）に代表される外来系土器の出土が目立つことがこれまでの調査研究で明らかになりつつあるが、小稿で取り上げた北関東型須恵器の存在もそれを裏付ける証拠の一つと捉えている。引き続き地道な資料検索をおこなうと共に、越後の7世紀後半、すなわち城柵造営前後の時期に「移民のムラ」として行屋崎遺跡が担ったであろう、その役割と史的背景について考察を深めていくことを今後の課題としたい。

謝辞

小稿は、令和3年12月8日に新潟県埋蔵文化財センター主催水曜日の職員講座「移民のムラ？田上町行屋崎遺跡」の内容の一部を活字化したものである。

小稿執筆にあたって田上町教育委員会の田畑弘氏には、行屋崎遺跡の調査にかんするご教示と多大なるご協力を賜りました。また下記の機関、個人の方々からは資料調査や文献調査等でお世話になりました。ここにご芳名を記して感謝申し上げます。

田上町教育委員会 新潟県埋蔵文化財センター 田畑弘 奈良佳子 小林弘 田海義正

引用・参考文献

- 飯塚 誠・徳江 秀夫 1993『少林山台遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
神川町教育委員会 1984『神川町遺跡群発掘調査報告Ⅲ』
協和町小栗地内遺跡調査会 1986『丑塚古墳群・寺山古墳群・裏山遺跡』
酒井清治 1988「関東における古墳時代の須恵器生産－群馬・埼玉を中心に－」『考古学雑誌』第73巻第3号 日本考古学会
酒井清治 1991「須恵器の編年 関東」『古墳時代の研究』6 須恵器と土師器 雄山閣
高崎市教育委員会 2009『史跡保渡田古墳群 井出二子山古墳』高崎市文化財調査報告書第231集
田中祐樹 2018「透かし入り土師器高杯の新例－田上町行屋崎遺跡出土資料の紹介－」『新潟考古学談話会会報』第36号 新潟考古学談話会
田中祐樹 2019「田上町行屋崎遺跡出土遺物にみられる外来系要素について」『研究紀要』10号 公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
田畑弘ほか 2015『行屋崎遺跡』田上町教育委員会
奈良佳子 2022「やきものから考える新津丘陵周辺の古代」企画展関連講演会当日資料
藤野一之 2009「北関東型須恵器の成立と展開」『群馬・金山丘陵窯跡群Ⅱ』駒澤大学考古学研究室
藤野一之 2019『古墳時代の須恵器と地域社会』六一書房
前山精明ほか 2012『大沢谷内遺跡Ⅱ 第7・9・11・12・14次調査』新潟市教育委員会

図版出典

- 第1図 国土地理院地図をベースに筆者作成
第2図 筆者作成
第1・2表 藤野2019を基に筆者作成
第3図 飯塚・徳江1993、神川町教育委員会1984、協和町小栗地内遺跡調査会1986を改変